

労働組合のグローバル化対応と 国際労働運動を担う人材育成

いちのわたり
市ノ渡 まさひこ
雅彦

●全日本自動車産業労働組合総連合会・副事務局長

企業はグローバル化を越え、ボーダーレスな国際競争環境下で生き残りを掛け、様々な施策に取り組んでいる。そのような時代に労働組合のグローバル化対応はどうあるべきだろうか。

自動車産業は完成車メーカーを中心に比較的早くから海外展開をしており、グローバル化に対応してきた産業と言えるだろう。しかし、企業のグローバル化に伴い、様々な労務問題が発生するリスクも高くなってきている。

労働組合がグローバル化に対応する為には、労働組合役員がグローバル経営対策の視点を持つことが必要だ。とかく、目の前の課題は国内にあり、国内の活動が優先される。これは、悪いことではなくごく普通の感覚だ。しかし、連結という視点が欠けていては、十分な経営対策活動とは言えない。世界各国の事業活動は繋がっており、海外の事業所で発生した一見小さく見える問題が、大きな問題となり、単独の利益を吹き飛ばしてしまうことは往々にしてある。日本の常識は国際社会では通用しないということは、いまや常識であるが、ボーダーレスな国際競争の時代においては、更に高い視点から自社の状況を俯瞰する必要があるということだ。

また、その際に忘れてはならないのは、海外で働く仲間との連帯だ。日本の労働組合と海外の労働組合とのネットワーク構築には、まだ課題が多い。自社の海外事業所でストライキが発生した際に、事業活動への支障を心配するだけでなく、そこに働く困難な状況に置かれた労働者の生活があるということも忘れてはならない。

これは、国際労働運動の本質を理解する機会を積極的に増やすことで解決されるのではないだろうか。国際労働運動に携わってこられた諸先輩の経験から学ぶことが重要である。また、労働組合の国際会議、セミナー、交流等に参加する際には、主体的な参画意識を持ち、そこで何を求めるのか考えて参加することも有益であろう。

企業はグローバル人材の積極的な育成に取り組んでおり、労働組合も国際労働運動を担える人材を早急に育成しなければならない。その為には、企業での実務経験と、国内労働運動の両面を経験した人材が国際労働運動に携わることが早道だと考える。国際労働運動は語学が堪能であるというだけで担えるものではない。社会人としての基盤と、国内労働運動の経験が国際労働運動にも活きるのだ。特に国際労働組合、各国ナショナルセンター・産業別労働組合の役員は国際労働運動に関する知識も経験も豊富であり、我々も経験に基づいた発言をする必要がある。

生意気なようだが、まずは自分自身が多くの先輩から学んだことを書かせて頂いた。多くの仲間、後輩達にその感覚を伝えていくことが、使命である。

まずは、この世界に飛び込んでみて、そこでもがくことが、自分の泳ぎ方を体得できる早道かもしれない。

Solidarity Forever !